

2-P-7

大学入学時の歯科健診と健診受診後の行動変容に関する調査

畑山千賀子

野村慶雄 溝部潤子 御代出三津子

学校における歯科健診は口腔内の状態を把握する機会として重要であるとともに、疾病を早期に発見し早期治療につなげることで、そして健診結果を踏まえた保健行動を行うことで疾病予防や生涯にわたる健康の増進を図るための保健行動を啓発することが期待できる。

現在、学校保健安全法では大学における歯科健診実施の義務を定めていないので、本学では、昨年度、新入生に対し入学時に歯科健診を実施し、予防や治療への行動変容を促すようフォローアップを系統的に行った。しかしながら、昨年度の受診者については、健診受診後の行動変容を十分に促すことが出来なかった。

そこで、今年度新入生に対する入学時歯科健診では、口腔内の状況を把握するための健診目項を見直し、知識啓発のため健康手帳を配布し、口腔保健の重要性に関する講義を行うことにより行動変容を促すことにした。

結果は、平成25年度・26年度の学生の歯科健診結果と月間別受診行動の比較より、効果的な受診行動へと繋がった項目については、歯科健診結果を明確な分類、定期的な受診勧奨、歯科健診後に健康手帳を用いて歯科衛生教育を行ったことである。これらのことは受診行動に多く結びついていることが示唆された。その後の受診行動が継続的に続いているか調査中である。今後も受診行動が継続的な行動となるよう支援を行っていきたい。

2-P-8

地域で生活する精神障害者の歯科的現状と課題

大川直美

野村慶雄 中村陽子 谷口俊恵 横川意音

精神疾患においてその病態や処方される薬の副作用から、口腔状態を悪化させることが報告されている。地域で生活する障害者の中でもとりわけ精神障害者の口腔の現状についての研究は少なく、精神障害者の歯科領域での現状と課題は明らかにされていない。

本研究は、精神障害者の口腔に関する現状を明らかにすることを目的とし、就労支援を受けながら地域で生活する精神障害者を対象に、アンケート調査と歯科健診を行った。

神戸市内精神障害者就労支援事業所利用者①19名について歯科健診、②140名を対象にアンケート調査を実施した。アンケート調査については、回収数は65枚(46.8%)で、回答者の平均年齢は44.2歳±10.9。診断名で一番多かったものは統合失調症28名(49.1%)であった。また、定期的に歯科を受診している人は約35%であった。

歯科健診について、平成23年度歯科疾患実態調査と比較した結果、DMF指数において高い傾向が見られた年代もあり、歯周疾患の進行状態については、どの年代においても平均よりも低かった。また、口腔関連QOLの指標であるGOHAIは、日本人の平均値よりも低かった。よって、口腔内に何らかの不具合を感じていても、歯科受診に繋がりにくい事が分かった。今後地域で生活する精神障害者への口腔衛生の支援を行ううえで、歯科受診を困難にしている要因を明らかにすることが課題であると考えられる。

※研究にあたり、足立了平先生、御代出三津子先生の御協力を得て歯科健診を行った。